

浦松佐美太郎著 『たった一人の山』

昭和の初めと言えば、登山というものが一般大衆の世界にも入り込んで来た時期ではあろうが、まだまだ選ばれた人々だけの優雅な道楽であったのではなかろうか。この本の著者も大学卒業直後渡欧し、その後の数年間をヨーロッパ・アルプスの登攀に費やしたというからセレブでハイソであったのであろう。ウィンパー『アルプス登攀記』の訳者でもある。本書の大部分はヴェッターホルン西山稜の初登攀はじめ、マッターホルン、アイガー、ドロミテなどヨーロッパ・アルプスの登攀記で埋められている。

当時の彼の地の山案内人や山麓の人々との付き合いなども描かれていて、国内の山に登るのさえ暇も先立つモノも無かった就職したての私には何か別世界のお伽の国の話のように感じられたものだった。それ故また、語られているヨーロッパ・アルプスの舞台が新鮮で、一生に一度は訪れてみたいと儚い夢を見たものだった。あれから40年になるが、アルプスはおろかヨーロッパには未だに足を踏み入れたことがない。

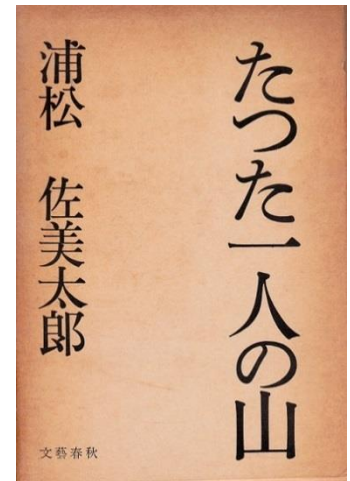
著者は、伝統的な登山のスタイルである「クラシックな登山」にこだわり、本書に登場するアルプス登攀も全てこのスタイルで統一されている。これらの登攀から半世紀経った後の新訂版発行に際しての「あとがき」で、「“ヒマラヤでなければ山に非ず”とか“人工登攀を駆使した岩壁の直登でなければ岩登りに非ず”などがもてはやされているが、これらは登山の正統から言えば邪道であって、登山の王道はやはりクラシック・スタイルである」と書かれている。著者の言うクラシック・スタイルというのがどのようなスタイルなのか明確ではないが、思うに、精神的に純粋に、正直に、かつ優雅に、あるがままの山と自分に向き合うことではなかろうかと推察される。

時代は変わった。登山の世界も変わった。より困難な山やルートを希求することは人間の欲望からして当然なことである。標高から言っても、山の深さから言っても、ヨーロッパ・アルプスなどとは比較にならないようなヒマラヤのジャイアントは、普通ではガイド・ポーターを引き連れた大キャラバンでなければどうにもならないし、いくらフリーが発達したとは言え困難なビッグウォールを登るためには人工登攀もやむ得ないことであろう。このような意味から、著者の言うクラシック・スタイルだけが登山の正統という主張には頷けないものもあるが、その一方で、自己完結的で“シンプル”な登山スタイルには捨てがたい味と郷愁があるのも事実であろう。

書名の『たった一人の山』というのは、どんなに多くの仲間と一緒に山へ登ろうと、山を見つめ、自分の心を見つめるのは自分一人なのであり、それはまた純粋と正直を極端に要求する営為なのであるという主張に基づいていることから、この間の事情は理解できる。

話が多少理屈っぽくなった。この本には、山の道具について書いた2篇が入っている。ひとつは山靴、もうひとつはピッケルである。山靴の方は、今は使わなくなった昔の山靴に時々油を引いて往時の山行を懐かしむというものである。ゴッホが描いている古い編み上げ靴の絵と同じ。私も学生時代に作った45年前の「たかはし」の靴を大事に保管している。10年ほど前に山で履いてみたが、皮がボロボロになっていて雨水が素通しであった。それでも年に2回くらいは油を塗ってピカピカにしてある。今はプラスチックブーツなどの履き捨てスタイルが主流だから、道具に対する愛着というものが無い。道具に愛着を持つというのも“クラシック・スタイル”の現われであろうか。はたまた、単なる懐古趣味であろうか。

ここでは、もう一編の「山と氷斧」について触れておきたい。氷斧とは今風に言えばピッケルのことである。アイゼンというものが発明される以前は、カモシカを追っていたヨーロッパ・アルプスの猟師は氷の斜面に手斧で足場を刻んで登った。従って、ピッケルの方がアイゼンよりも歴史が古い。やがて



登山家がツルハシと手斧を合わせたような形のピッケルの原型を山の鍛冶屋に打たせたのがピッケルの始まりである。この原型は、やがてシェンク、ウィリッシュ、ベントなどという鍛冶屋によって洗練されたピッケルとなっていった。この一篇はこれらの鍛冶屋とのほのぼのとした交流や実際に彼らに打たせたピッケルで登ったアルプスの山々などの回想記である。(昭和42年文芸春秋社刊、新訂版)。

余談であるが、これらのピッケルは日本にも輸入されたが、ヨーロッパ帰りの榎有恒や松方三郎などが日本の鍛冶屋に作らせたものが仙台・山内作、札幌・門田作となって国産ピッケルが普及した。シェンクやウィリッシュやベントのピッケルはヘッドのラインが流れるような優美な曲線の細身で大変に美しかった。また初期の山内、門田作も日本刀を思わせる名作であった。学生分際の際にはこのような高価な逸品が買える訳もなく指を咥えて見ているしかなかったが、やがて門田の普及品(炭素鋼並製)が出て、やっとそれを買った。それでも大学の半期の授業料相当の値段であった。家から送られてきた授業料をチョロまかせて買ったが、大学から授業料未納通知が親元に届いて、その言い訳に四苦八苦したことを覚えている。(2007年 記)



私の門田製のピッケル。炭素鋼、並製。今はこのようなウッドシャフトの長尺物は壁飾りになっているだけだが、後期高齢になった今は、杖として役立つかも・・・

《追記》

- 1) 2014年にスイスのグリンデルワルトに行った際、グリンデルワルトの町中にあるというベントの鍛冶屋がどうなっているのだろうかと訪ねてみた。今は4代目のオヤジが鉄骨の溶接などをしている鉄工所になっていたが、それでも注文に応じてまだウッドシャフトのピッケルを年に何本かは作っていると言っていた。欲しければ来年夏までに作っておくので、又来年お出でと・・・。

看板に“Eispickel-Schmiede BHEND”
(ピッケル鍛冶 ベント)とあるのが泣かせるではないか。ベントと同じくグリンデルワルト村の鍛冶屋であったシェンクの家も訪ねて見たかったが、こちらの方は町をかなり登った上の方にあるらしいので行けなかった。

右の写真は2017年にグリンデルワルトを再訪した際にグロッセ・シャイデックの峠から、浦松が初登攀したヴェッターホルンを写したものであるが、右のギザギザの稜線が彼が初登攀した西山稜である。

文芸春秋社 1958 年刊

[「山書の小溪」目次に戻る](#)

